

## 龍谷頭真会四十周年記念公開講座 「現代社会と浄土真宗について考える」

大阪教区豊島北組如來寺住職 釈 徹宗

このたびは、龍谷頭真会四十周年記念の講座と伺っております。四十周年、誠にありがとうございます。

先ほど、ご門主さまのお言葉にもありましたけれども、この四十年で確かに社会が大きく変化しました。日本の現代社会は、近代成長期が終わり、近代成熟期に入った、そんなふうには考えております。

また、宗教学的にいきますと、宗教の在り方もこの四十年で大きく変質しております。特に注目すべき現象として、ここ数年、伝統的な宗教に現代人が目を向けるようになってきている点を挙げる事ができるでしょう。伝統的な仏教が注目されている。あるいは神道が再評価されている。修験道に注目が集まる。論語が盛んに読まれる。そんな傾向があります。この状況になったのには、いくつかの要因を挙げる事ができます。

ただ、現代人が浄土真宗に魅力を感じるといった事態は、残念ながらあまり見ることができません。これにもいくつかの要因があります。ひとつと言えることは、現代人は宗教に「身体性」を求めている、しかし、浄土真宗は仏教の中ではかなり身体性が低いタイプの宗派です。だから、あまり現代人にウケない。現代人は、瞑想や修行や巡礼など、宗教に身体的なメソッドを求めています。

とはいえ、もちろん、浄土真宗が説くところは、現代人の苦悩に込めるものであることは確かです。その辺りを後半にお話しできればと思います。

今日は「現代社会と浄土真宗について考える」という講題となっております。いい加減にタイトルを付けたので、今、ちょっと後悔しています。事務局の方から、「とりあえず講題だけでも」と言われ、いろんな話ができるようにつけたつもりなのですが、いざとなるとなかなかお話が思い浮かびません。

皆さんは、地方議会の最前線におられるとのこと。社会というのは、領域によって流れる時間が違うと思います。つまり政治の時間の流れもあれば、農業の時間の流れもある。双方、流れは異なります。私は、医療、教育、宗教、司法の領域は、あまり急激な変化は向かない領域ではないかと考えています。つまり、政治とか経済に求められるスピードと、宗教領域の変化のスピードは同じではない。皆さん方はまさにそのインターフェースに立っておりますこと、敬意を表したいと思います。

さて、「いつの世も変わらぬ苦しみ」というものがあります。例えば、老いの苦しみ、病の苦しみ、死の苦しみなどは、人間として生まれた限り必ず出遭っていかねばなりません。避けることはできない。これらをどう引き受けて生き抜く、死にきっていく、そういった人類の知恵の結晶が宗教である、そういう面があります。

この「いつの世にも変わらぬ苦しみ」ともうひとつ「その時代やその社会に生じやすい苦悩」や、特有の苦悩があります。そして、この「現代人が抱えやすい苦悩」が、仏教の教えが必要だと思うのです。ちょうどかみ合うと言いますか、現代の苦悩に対して、仏教はヒントの宝庫でしょう。だから、今、ちょっと勘のいい人というのは、仏教に目を向けているんじゃないか。どうも伝統仏教あたりに大事なものがあるような気がする、そう感じている人は少なくない。そう感じています。

そこで、本日は「現代人が抱えやすい苦悩」についてお話をしてみます。現代人が抱えやすい苦悩として、「明確な自己を確立せよ」と社会から求められています。成熟した社会では、あらゆる場面で自己決定が求められています。それぞれの立場を互いに尊重し合うとなれば、落としどころは自己決定になるのです。ですから、現代社会は、自分で選択・決断して、自分で責任を持つ。それが常に求められるのです。そんなわけで、意識的にも、無意識的にも、現代人というのは「自分というものを確立せよ」というメッセージを受けながら暮らしています。

例えば、大学の教育も同じような事情です。入学して一年生のときから、キャリア教育と称しながら、いかに自分というものを表現するか、いかに自分というものを確立するか、主張するか、そういうトレーニングをやっています。これやらないと、就職できないからです。

そして、自己決定、自己主張できないと、だんだん端っこに追いやられていくような社会となっています。これは成熟した社会のしんどさですね。こういう社会はきついです。このあたりに現代人特有の苦悩の根があります。なぜなら、私たちは「自分というもの」が強ければ強いほど、苦しまなければいけないのです。われわれの心と身体は、そういうメカニズムになっています。

#### ■認知的不協和状態と自我防衛反応とダブルバインド

このあたりを、認識と現実のずれから考えていきましょう。認識と現実がズレた事態を、認知的不協和状態といいます。ちょっとこれ、覚えていてください。

こういうことは、われわれ、経験上知っていますね。自分の都合通り、思い通り、うまく現実が運ぶと、脳というのは幸せホルモンが分泌するようになっていきます。自分の都合通り、思い通りにいかないと、思いと現実とがズレる。ストレスが生じます。この状態が長く続くと「自分というもの」が壊れます。結構もろいです。「自分というもの」は、何とかこのずれを解消しながら暮らさねばならない。

とまあ、私たちの心と身体はそんな仕組みになっているのです。ですから、人もうらやむような暮らしをしていても、本人は苦しいかもしれない。周りから見ると大変だろうなと見えても、幸せかもしれない。このあたりが人間のややこしい部分ですね。

もし認知的不協和状態に興味がおありの方は、フェスティンガーとシャクターという学者が書いた、『予言が外れるとき』といういい論文が日本語の本にもなっています。一度お読みください。面白いです。アメリカのいろいろなコミュニティを調査して、人間の苦しみのメカニズムを解明しようとした、なかなかの力作です。面白い事例がたくさん出てくるのですけれども、ひとつご紹介します。キーチという中年女性の事例です。

キーチという人が、あるとき宇宙人から、何月何日に、この地帯へ壊滅的なダメージを与えられるというメッセージを受けるのです。キーチさんは、そのことを周囲に説いて回ります。ほとんどの人は相手にしないのですが、中には信じる人もでてきます。何人か集まって、大移動の準備をするのです。家も処分して、仕事もやめて、みんなで移住するのです。

やがてキーチさんの預言の日がきます。当然何も起こらない。なんだばかばかしいとグループは解散した、……とならないところが人間の面白いところなんです。

キーチさんのグループは、このときからキーチ教という宗教教団になるのです。なぜか。キーチさんのグループは、自分たちの人生をかけて、この予言を信じて活動したわけです。そして何も起こらない。つまり、大幅に認識と現実がズレたのです。「自分というもの」の危機ですよ。だからこのグループは、「そうか、われわれがこんなに一生懸命活動したから宇宙人は攻撃を待ってくれたに違いない。だから、この活動をやめるわけにはいかない」と考えることで、そのズレを補正した

わけです。

これなどはかなり極端な例ですが、実はわれわれもしょっちゅうそんなことをしているのです。このようなズレの補正を「合理化」と呼びます。

認識と現実のズレは、うまく理由をつけることができれば、補正されるのですね。だから、われわれは、理屈をつけて理解しようとする。俗に「酸っぱいブドウの論理」なんて呼ばれます。

インソップ童話に出てきまね。高いところにブドウがなっていて、キツネがとうとうとする。何度も飛びつくのですがどうしてもとれない。ブドウが食べたいという認識と、どうしてもとれないという現実。ズレが生じます。結局、キツネは諦めなければいけないのですが、諦める際に「あのブドウはどうせ取っても食べられないほど酸っぱいものに違いない」と言います。だから、取れなくてたつていいんだ、と自分自身を納得させる。自分自身をだますわけです。これも「合理化」です。こんな調子で、われわれは無意識的にズレを修正しているんですね。これらの反応を総称して、自我防衛反応といいます。ほかにいろいろとあるんです。

人のせいにすることでズレを補正する「投影」とか、現実の問題を見ないでほかのことに夢中になる「補償」とか、いろんなことを無意識的にやっているんです。こういう反応は、ある程度必要なのです。こうしないと社会適応していきません。

でも、しょっちゅう自我防衛反応で逃れていると、そのうちに癖になってしまいます。ちょっとしたことで、合理化で逃げる人とか。いつも補償で逃げる人とか。そういう人格になってしまつて、逆に社会適応ができなくなつていきます。

自我防衛反応というのは、何らかの欺瞞があります。現実をゆがめ、自分自身もだます。生きるということとは本当に難しいですね。

さて、現代人は常に自己決定を求められる社会に生きています。でも、自分というものを強く持

てば持つほど、認識と現実がずれて、その落差で苦しまなければいけない。これが現代人的なしんどさですね。現代人はこの矛盾に躓きやすい。こういうような、別々の方向へと引っ張られている事態を、二重拘束(ダブルバインド)といいます。現代人の陥りやすい苦悩は、自己決定のダブルバインドです。

現代人は「自分というものを確立して、自己決定、自己表現していかねばならない。その一方で、「自分」というもの」(自分の都合)を強くもてばもつほど、苦しまねばならない。まったく相反する方向へと引っ張られているのです。

### ■連鎖の転換

この現代人特有の苦悩に対して、仏教の教え、仏教がもつ心身の技法がとても有効だと思つています。仏教が説いている心身を調えるメソッドですね。認識を変えていく技術。これが現代人にとって非常に重要なヒントを数多く内包しているのです。

だから、現代人で勤のいい人は「どうも仏教に大切なことがあります」と気づいていると思います。そんな人が少なくない。

仏教はこんなふうに説いているんですね。われわれが生きていく上で避けることのできない苦しみとか悩み、あるいは恨みとか憎しみは、何とかしようと思つても何ともならない。なぜなら結果だから。われわれは苦しみとか悩みをなんとかしようと思つて躍起になってしましますが、それは結果なので何ともならないと言つています。坂をボールが転がつていくみたいに、どんどん進んでいくので追いつかない。だから、あるとき、視点を変えて原因の方を見ないといけない。結果じゃなくて、原因の方を見るのです。このように原因と結果で現象や存在を把握する立場を「因果律」と呼びます。

しかも、仏教は「縁起」という独特の因果律に立つところに最大の特徴があります。これは、世界中にさまざまな仏教宗派があろうとも変わらない立ち位置です。ここに立たないと仏教ではありません。必ず縁起という因果律に立ちます。

ついでに言いますと、世界には因果律に立たない宗教もたくさんあります。キリスト教とかイスラム教は因果律に立たないのです。神の意志というのが中心になりますので。

仏教の場合は縁起という因果律に立ちますので、苦しみも原因と結果で考えます。結果である苦しみを、小さくしようと思っても小さくならない。それどころか、一つの苦しみは次の苦しみを産み出し、一つの憎しみが次の憎しみを産み出すという、どんどん連鎖していつて止まらなくなるというのです。これを仏教用語で相續といっています。

何とかこの苦しみとか憎しみの相續を転換していかなければいけない。そこに仏教の問いの第一歩があるわけです。

例えば、「憎しみの連鎖を転換」について有名なエピソードがあります。一九五一年、サンフランシスコ平和会議で行われた、スリランカ代表のスピーチです。一九四五年に日本が敗戦を迎えてアメリカの統治下になったわけです。六年たって、そろそろ日本の独立を認めないといけない。朝鮮半島の事情もあるというわけで、日本の独立についての会議が開かれました。ここは日本外交の正念場です。失敗したら独立国に戻れない。しかも一カ国、一カ国と条約を調印しなければいけないのです。

残念ながら、全部はうまくいかなかったですね。一部はうまくいかなかったのですけれども、大部分の国と調印ができて独立国に戻ることができました。私はそのサンフランシスコ平和会議の議事録を読んだことがあるのです。

読んでみたらよく分かりました。各国にしても外交の腕の見せどころなのです。どれだけ日本

から取れるかという感じですが。うちはこれぐらい補償金をもらわないと調印できないとか、うちはこの条件でないと納得できないという、日本というパイの取り合いです。

その中で、仏教国のスリランカ代表のジャヤワルダナが演説します。そのとき彼は、『ダンマパダ』の第五番を朗唱するのです。『ダンマパダ』は、最古の仏典の一つです。仏陀の言葉がかなり原型そのまま残っている部分もあるだろうと言われています。日本語では、『法句経』と訳されています。『仏教のバイブル』とも呼ばれます。

この経典は、一番から四百二十三番までの金言集になっています。確か「身から出たさび」も『ダンマパダ』から出ていると聞きました。スリランカとかミャンマーでは、ちょうど日本の『般若心経』みたいに日常のお経で、全文覚えてる人も多いそうです。

その『ダンマパダ』第五番、ジャヤワルダナの演説のおかげで有名になりました。「恨みに対して恨みをもって報いるならば、恨みのやむことはない。これはいつの世にも変わらぬ真実である」、これが第五番です。ジャヤワルダナはこれを朗唱した後、私は恨みの連鎖をここで止めたい。だからうちは無条件調印しますという演説を行いました。会場は感動に包まれて、同じ仏教国であるラオスとかカンボジアも無条件調印を決めます。

ジャヤワルダナが自分で言っているのですけれども、サンフランシスコに行く前に日本に寄ったらしいです。日本でいろいろな人に会ったというのです。東京で政治家にもたくさん会ったし、京都でお坊さんにも会った。鈴木大拙にも会ったらしいです。こういうときに誰と会うかというのは、非常に大きいと思います。そういう人材をまず育てていかなければいけませんね。

彼は、「この国の人たちの中には仏教のこころが生きている。信頼しても大丈夫だ」と確信したので無条件調印を決めたと言っています。

実はこの話には後日談がありました。東京工業大学の土田紀行先生に教えてもらいました。高齢になってからジャヤワルダナが日本に来ていらっしゃるらしいです。サンフランシスコでのスピーチは有名ですから、恩人だということで宮中晩餐会に招かれた。そのときにジャヤワルダナは、「私がサンフランシスコに行く前、日本に寄ったときは、まだ焼け野原が残っていて、人々は飢えていて大変厳しい状態でした。今日、こんなに発展されて、ここからお喜び申し上げます」というスピーチをしたらしいのです。

ところが、それはまったくの社交辞令だったらしくて、控室で身近な人だけがいるところで、「私の愛したあの日本人はいつたどこに行っただ。日本人は、このきれいな景色と引き替えに、最も大事なものをどぶに捨てたのか」といって泣いたらしいです。

ジャヤワルダナが語ったように、仏教では「この場、この瞬間を起点として、次の瞬間が決まる」と考えるのです。仏教独特の時間論と存在論です。この一瞬を元にして次の瞬間が変わる。一瞬、一瞬独立しているのですけれども、鎖みたいにつながっている。映画のフィルムが一コマ一コマばらばらになっっているけど、つながっている。そんな感じですね。独特の時間論・存在論を持っておりません。

例えば、皆さんが映画を観ているとき、「あまり面白くないな」と思い始めると、だんだんその映画のあらばかり気になり出したりします。そんな具合で、この一瞬、どんなふうに考えるか、どんな言葉を出すか、どんな行いをするかによって、次の瞬間が変わってくるというのです。これを「刹那滅」と言います。私がこうやって話しているのを皆さんが聞きながら、「あまり面白くないな……」と思うと、この九十分間は大変つらい時間になっていきます。ここは一つ、何が何でも面白くおもしろいことをお勧め致します(笑)。面白くないなと思っていると、だんだん私の言葉が届かなくなっけてきます。

話をもどしますと、苦しみとか悩みの連鎖を安らぎの連鎖へといかに転換していくか。苦しみに支配されてそつちばかり見えていたら、いつまでたってもこの連鎖は止まらない。原因の方に目を向ける。そういうことです。そして、その原因とは「自分の都合」なのです。

苦悩を小さくしようと思っても小さくならないのですけれども、原因の方(自分の都合)を調べると、結果(苦悩)も次第に調べてくる。原因に目を向けないと、どんどん暴れますから、苦悩の連鎖も止まらない。

#### ■これからの方向性

さきほども言いましたように、自分の都合を主張せねばならない社会に生きていながら、自分の都合を持つほど苦悩の濃度は濃くなっていく。「自分というもの」の濃度が濃ければ濃いほど、苦悩の深さも深まる。

自分の心と身体をトレーニングして、自分の都合というものが暴れないようにしていく、それが仏教という宗教のメインラインです。

この部分に関しては、現代を生きていくヒントが数多くあると思います。これから本格的に始まる成熟社会を生きる知恵です。

成熟社会について少しお話しします。すでに近代高度成長の時期は終了したようです。一昨年、世界で最も高度成長した国をご存じですか。一位はイラクです。二位はシエラレオネ。三位はモンゴルです。つまり、もともとあまり状況がよくない国が高度成長しています。

日本のような近代成長期が終わった国は、近代成熟期に入っていきます。もちろん、部分的にはまだ伸びるようなところもあるのですが、全体から見れば急成長することはありません。

成熟期のテーマは何かというと、フェアとシエラだと思います。いかにフェアな社会をつくっていくか。社会の公正性をいかに担保していくか。そして、あるものをいかに分かち合って(シエラ)していくか。成熟社会のテーマはここにあります。そのことを東日本大震災で確信しました。

なぜなら、これが担保されている方が危機状態には強いのです。危機状態では、いかにそれまでフェアとシエラが担保されてきたかというのが問われる事態に直面します。ここがこれからの成熟社会の重要なポイントです。

東日本大震災が起こったときに、私はアメリカのCNNから取材を受けました。いろいろな宗教者に取材しているのです。報道されたものも見ましたけれども、ユダヤ教のラビとか、イスラム教のウラマーとか、キリスト教の牧師さん・神父さんなどに聞いていました。

取材では二つのことを聞かれました。一つは「なぜ神はこんな事態を起こしたと思いますか」というものでした。「いやいや、仏教はそんな場に立たないのです」と答えたら、かなりびつくりしてついでに言いますと、ほかの宗教者の方々も誠実に答えられていました。ユダヤ教のラビは、彼らの『聖書』に出てくる地震の話をしていました。「そこに神はおられなかった」と書いてあります。だから、今回の地震も神の意志ではないと答えておられました。

イスラム教のウラマーは、「神の御ところは分からない」と答えていましたね。実はこれ、一神教としてはもつとも誠実な答えですね。

キリスト教の牧師さんも、やはり神のこころは分からないとおっしゃっていました。神のこころは分からないけれども、今、東北で苦しんでいる人たちとともに神はおられると答えていました。

しかし、仏教はそういう立場ではありません。縁起という因果律の立場に立ちます。それを説明してみたのですが、うまく伝わりません。

少しは仏教について勉強してから取材すればいいのに、などとも思ったのですが。とにかく、全

ての存在も現象も関係性で一時的に成り立っている、という話をしました。しかし、なかなか伝わらない。とっさにいい喩えが出てこなくて……、「たとえば今回の大地震は、太平洋プレートと北アメリカプレートがせめぎ合って起きたでしょう。そんなふうに、いろいろな要素が習合して、一つの現象や存在が起こるといふ立場に立つのです」と話しました。そうしたら報道で「仏教では地震は北アメリカプレートと太平洋プレートのせいだと考える」と載せられてしまい、世界の仏教徒に申し訳なくて(笑)。

もう一つの質問は、なぜこの事態になっても、日本人はあんな秩序だった行動ができるのかというものでした。以前、アメリカにハリケーンのカトリーナが来た時があったでしょう。そのとき略奪、収奪、暴行、奪い合いが起こり、かなりひどい状況になった。一方、日本ではそういうことがあまり起こらない。

CNNとしては、「それは日本人が仏教徒だからです」と言っただけでほしいようなんですけどね(笑)。そちらに話をもつていこうとしていました。

でも、私は「秩序だった行動をする方が、早く事態がよくなると、多くの人がわかっているからではないか」と答えました。実際に、秩序だった行動を取った方が事態は早くよくなるのです。ところが、それが分かっているにもかかわらず、その通りに行動することは困難です。

この部屋に大勢の人がいて、ここしか出口がない。そこに災害が起こると、本当は順序良く出ていけば全員出ることができるともかわからず、みんなが出口に殺到することでかえって事故が起こったり、将棋倒しになって誰も出られない、ということが起こり得ます。世界の多くの地域で、そういうことは起こっているのです。社会的フェアネス(公正性)が信用できない社会で起こりやすいでは、そういうことが起こる。

インドの人などは、社会が公正であるとは考えていない。なにしろすごく不公平な社会ですからね。順番を守ってに並んでいたら、ちゃんと自分に回ってくるということが信用できない社会です。だから、出口に殺到するようなことが起こる。

社会的公正さを担保するというのはとても重要なことです。特に危機のときに強い。つまり、日本では数十年にわたって比較的公正な社会を運営してきたのが、今回の秩序だった行動につながったのではないか。そのように話をしました。もともと大きな災害があっても、日本人はおとなしく我慢する傾向をもった民族性があるようなのですが、それに加えて公正性の高い社会を運営してきたことが大きな要因でしょう。

その意味において、これからの社会で大切なことは「社会的なフェアネス」なのです。そして、もう成長期を終えた日本においては、あるものをいかにシェアしていくかも大きなテーマとなります。つまり、これからの近代成熟期の社会のテーマは「フェアとシェア」というわけです。

そして、これは仏教が最初期から主張していたことなのです。フェアとシェアの実践は、仏教の目指す社会でもあります。いかにフェアな体質を身に付けていくか。シェアする体質を身に付けていくか、これが現代人の課題となります。

また、ついでにいいますと、中道も現代人にとって学ばねばならない思想でしょう。中道も、縁起と並んで仏教の柱の一つです。

仏教では、「何が正しくて、何が間違っているか」に取り組む際、この中道の思想が重要になります。仏教では、どんな行為でも、どんな思考でも、偏ってはだめだと説きます。極端はだめなんですね。極端から離れることを中道と言います。

どんなに正しいと言われている行為でも、どんなに正しいと思われる思考でも、放っておいたらどんどん偏っていく。偏ったらダメ。偏ったり、こだわったり、とらわれたりしていない状態を正

しいと仏教は説くのです。仏教の中道の面白いところです。

この中道の感覚を身につけていくためには、こだわりや偏りから離れるようにトレーニングしなければなりません。たとえば「布施」もこだわりや偏りから離れるトレーニングのひとつです。布施の中の財施は、握っている手を離すトレーニングです。普段から握っている手を離すトレーニングを実践していないと、いざという時に手をはなすことはできない。執着から離れることはできない。そのように仏教では考えるんですね。

なにしろ、老病死など、逃げようのない苦悩に直面する日がやってきますからね。いざというときの苦悩を引き受けていくためにも、普段からこだわりや偏りから離れるトレーニングをするわけです。

こんなふうに、仏教には現代人が抱えやすい苦悩に対してのとても適切なメソッドがあるように思います。ぜひとも仏法に耳を傾けていただきたいところです。

#### ■「達人ルート」と「愚者ルート」

さて、では「自分の都合」が最も小さくて済むライフスタイルは、どのようなものがあるでしょうか。それは「出家」になります。

出家は仏教の専売特許ではありません。世界中の多くの宗教に、このかたちがあります。また、仏教以前から、出家というライフスタイルがあります。

仕事をしない、家庭を持たない、ひたすら修行と学びに専念するライフスタイルです。ゴータマブツダもこの道を選びました。なぜなら、自分の都合を最小限にできるからです。

自分の都合を小さくしてばかりいたら仕事を続けていきませんよね。時には競争に勝たなければ

いけない。うそをつかなければいけない。そんなことになったりします。あるいは、家族を守るためには暴力だって使うかもしれません。

だから、仕事をしない、家庭を持たない、となれば、自分の都合は小さくてすむ。

仏教という山があるとはしますと、一つの登山ルートに「出家のルート」があります。「達人ルート」と言ってもよさそうです。ゴータマ・ブッダもこの道を歩んだわけです。もちろん、この道を歩める人はごくわずかです。大部分の人はもう一つの道、ごく普通に社会生活を営み、家庭生活を営みながら、仏教の教えに導かれてこの苦難の人生を生き抜いていく、信じていくという「凡人ルート」です。「愚者ルート」とも言えます。

浄土真宗は、明らかにこちらのルートの代表選手だと思います。ごく普通に社会生活を営みながら、仏教の教えに導かれて生き抜いていく。

こちらのお話を進めていきます。お手元に配布致しました『真宗宗歌』をテキストに使っていきます。

せっかくですので、ご一緒に一番から三番まで歌ってみたいと思います。ご協力をお願いします。伴奏がありませんので、アカペラで歌わねばなりません。

### 〔真宗宗歌〕全員で合掌

大変素晴らしい歌声をありがとうございました。この『真宗宗歌』は大正時代につくられて、真宗各派協和会が作詞しました。知恵を寄せ合ったのか、なかなかよくできています。

例えば、二番の後半の歌詞に「六字のみ名を」となえつつ「世の生業（なりわい）に いそしまん」とあります。浄土真宗という仏道を端的に表しているな、という気がします。

では、順番に見ていきましょう。まずは、「ふかきみ法（のり）にあいまつる」とあります。「み法（のり）」は「教え」という意味です。「あいまつる」の「まつる」は謙譲語です。つまり、「深い教えに遇わせていただいた」という出だしですね。かなり丁寧な言い方です。この「くさせていただく」という言葉遣い、われわれ真宗者の誇るべき伝統だと思います。昔からこういう言葉遣いをしてきました。昔からお同行は決して、「念仏するとか」「法事を勤める」とか言わずに、「お念仏を称えさせていただく」とか、「お年忌さんを勤めさせていただく」という言葉遣いをしました。「くさせていただく」は、視点がひっくり返っています。自分の力でやっているわけではない、ご縁をいただいて、させていただいている。他力の働きでさせていただいている。そういった心がこの言葉遣いを生み出してきた。常に受け身で語るような独特な言葉遣いですね。

江戸の始めぐらいに、『醒睡笑』という浄土宗のお坊さんが書いた本があつて、千以上の笑話話が集められています。その中で、浄土真宗の人は何かというと、「お」とか「ご」とかを付けるといつて、からかって書いてあるのです。

確かに『正信偈』と言わずに、『お正信偈』と言います。「和讃」も「ご和讃」。そんなふうに使いますよね。昔からやってきたので、その言葉遣いが浄土真宗の様式となっているわけです。

そういう意味では出だしの歌詞はなかなかいいですね。それに、この「あいまつる」の「あう」が平仮名になっています。もし漢字で書くとしたら何があるか考えてみますと、まずは「会」が思い浮かびます。この字は形から成り立ったそうです。いろいろな方向からやってきて「会う」。集合とか会合は、この「会う」です。

また、「逢」という字も使いますよね。これは、糸へんを付けますと「縫う」という漢字になります。つまり、二つのものを縫い合わせるみたいに、二つのものが合うときにこの漢字を使うらしいです。



デートで逢う、恋人に逢う、逢い引きとか。この字なんですね。

「遇」という字もあります。これは人べんにしますと偶然の「偶」になります。たまたま、ばったり出会ったときにこの字を使うようです。

では、親鸞聖人は他力の教えにあつたときをどんな漢字を使っておられるのか。それは「値」です。これはきつちり書き分けておられます。

これはどんな時に使うかと言いますと、入れ物と蓋のように、寸分違ひなくぴたつと合つたときに、この字「値う」を使ったそうです。今の当用漢字では使いませんが。

親鸞聖人は「まさに私のための教えに出あつた」という実感があつたのだと思います。どこまでいつでも自分の都合をどうしても捨てきれない。人を傷つけて生きていくしかできない。そんな自分がついにあつた教えなのです。

また、「値遇」という言葉も使つておられますので、たまたま出あうことができた、という思いもあつたかもしれませんね。たまたま法然聖人に出あうことができた。

ですから、この「ふかきみ法(のり)に あいまつる」の「あう」に漢字を当てはめるとしたら、「値」でなければダメだと思ふのです。でも、当用漢字で使いませんので、ほかの漢字を使うぐらいなら、平仮名のままの方がいいでしょうね。

続きを読んでいきましょう。「身の幸(さち)なにに たとうべき」とあります。この身の幸せを何に例えることができましようか、何ものにも例えることができません。反語というレトリックです。私のための教えに出あつた、この身の幸せは何ものにもたとえることができませぬ、という歌詞になつています。

そして、「ひたすら道を 聞きひらき」と続きます。「聞きひらき」という表現がいいですね。聞き続けていくうちに間違ひなく開けてくる光景というのがある。だからこそ仏道なのですね。

「お浄土があるとは思えないから信じられない」とか、「死後の世界は絶対あると思うから信じる」とか、そういう位相では見えない世界がある。聞き続けていくうちに(向こう側から)扉が開く。「聞きひらき」です。ここで、浄土真宗の重要な要のひとつ、「聞く」が出てきます。

続いて、「まことのみ旨(むね) いただかん」というなつております。「み旨(むね)」は「教え」という意味なので、「本当の教えをいただいでいきます」と強い意志を感じる歌詞となつています。

この「教えをいただく」ことを、浄土真宗では「信じる」というふうに表示致します。浄土真宗の重要な要のふたつ目、「信じる」というのが出てまいります。

もともと、仏教が説く「信じる」というのは、独特なところがあります。例えば、「イワシの頭も信心から」ということわざがあります。何でもいいから、信じたら生きる力になる、そういう意味ですね。そのとおりです。人間のこころと体のメカニズムからいっても間違つていないと思ひます。地方によっては、イワシの頭とヒイラギの葉っぱを魔よけにつり下げることがあります。捨てるようなイワシの頭みたいなものでも、信じたら生きる力になる。そういうところからできたことわざでしょう。

何しろ、人間のあらゆる感情とかこころの動きの中で、「信じる」というのが一番強いのです。疑つたり、喜んだり、悲しんだりするより、「信じる」というのが一番強い。だから、弱い民族から一神教というのが生まれます。

民族ひしめくあう中で、何一つ持たない弱い民族、虐げられている民族が苦難の人生を生き抜くためには何があるかというところ、「信じる」ことです。しかも、みんなが同じものを信じる。「信じる」という一点にフォーカスする。そうするのが一番強い。だから、虐げられた民族から一神教は生まれやすいし、一神教というのはやっぱり強いのです。一点にフォーカスするみたいな強さがあります。

ですから、イワシの頭でも信じたら生きる力になるのは間違っていないのですが、仏教ではこれを「信じている」とは言いません。仏教で「信じる」という言葉の原語は、シユラツダー、アディムクテイ、サツダーなどがあります。これらの言葉は、「身もこころも納得する」という意味が内包されています。だから、なんでもいいからただ単に信じればいい、というわけではない。アディムクテイは「信解」とも訳されています。これなどは、原語の意味が伝わりますね。

仏教の教えを聞いて、しっかりと受けとめて、身にそなえていく。それが仏教の「信じる」です。そこから考えれば、「まことのみ旨(むね) いただかん」は、よくできた表現だと言えます。

#### ■智慧と慈悲

では二番を見てみましょう。「とわの闇より すくわれし」となっております。「永遠の闇から救われた」ということですね。ご存じのように、仏教では「我々は真つ暗な中に放り込まれたような存在」だと捉えます。「無明」です。自分の姿も見えないし、周りも見えないし、どこに進んでいいかも分からない。

真つ暗な中に放り込まれているような存在であるこの私に、仏教の教えというともしびが灯る。闇が打ち破られて、ぱあっと明るくなる。自分がどこに立っているかもわかるし、どんな姿をしているかも見えてくる。どの方向を歩いて行つていいかも分かってくる。

ですから、仏教の莊嚴は、お光とお花ですね。お光がほとけの智慧を表します。「お花は、ほとけの慈悲を表します。智慧と慈悲です。仏教は智慧と慈悲の宗教です。」

キリスト教やイスラム教は、啓示型宗教に分類されます。啓示とは、ある日突如として神がアクセスしてくることです。この神の言葉を聞いた人を預言者といいますが、未来を予言する予言者ではなくて、言葉を預かった者という意味です。神の声を聞いた人は、神の教えを伝えていかなければなら

ない。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教はそういった構造をもっています。

それに反して、仏教は自分というものを点検して、教えに照らされて自分という姿が見えてきて、智慧と慈悲の実践を目指して歩み続けるといったタイプの宗教です。

浄土真宗以外は、三尊形式で仏さまをおまつりしています。仏さまがおられて、その両横に菩薩をおまつりするという形式です。両横の菩薩は、智慧と慈悲を表しています。真ん中の仏さまは悟りを表現しています。仏教の理想です。三尊形式は仏教の教えを端的に表しているのですね。

私は若いとき、キリスト教の造形にはまっています。いろいろな見て歩いていました。バチカンでミケランジェロのピエタを見たとき、時空がゆがむかというぐらいの聖性を感じました。もう、洗礼を受けようかと思つたくらいです(笑)。そのときは仏教の仏像の良さは分からなかったのです。お恥ずかしい限りです。

その後、三十三間堂の二十八部衆など、密教の造形が魅力的に感じるようになりました。明王像や天部像とか、ユニークですからね。

でも、そのときもまだ、仏像の面白さはわからなかったんです。今から考えたら見る眼が幼かったです。なにしろ、画一的で規則だらけですからね、仏像は。ご存じのように、三十二相という制約があるでしょう。それを守らなければいけない。

ところがあるとき、仏教の理想である「人間が喜びにも悲しみにも支配されない状態」について考えているうち、「そのときの顔って、どんなものなのだろう」と思い至つたんですね。そうしたら、その顔は仏像のあの顔だとわかったんです。あれ以外にあり得ない。そうしたら、仏像がものすごく魅力的に見えてきて。仏像の顔は、人類の到達点の一つですね。

三尊形式では、真ん中が阿弥陀さまになると、こちらには観音さま、こちらが勢至菩薩となる組

み合わせが一番多いですね。観音さまが慈悲を表して、勢至菩薩が智慧を表しています。これが真ん中がお釈迦さまになりますと、こちらは文殊菩薩、こちらが普賢菩薩のセットが一番多いです。文殊さまが智慧、普賢さまが慈悲を表します。

文殊さまは獅子に乗っていて、勢至さまは白象に乗っています。ついでに言いますと、歌舞伎の連獅子の原話は、能の「石橋」です。日本のお坊さんが地方各地をずつと巡っていて、ある石の橋のところに来て、ここから先は簡単には行けないよと子どもが言うのです。ここは文殊さまのお浄土だから。それで橋のこちら側で待っていると、向こうから観音さまの獅子がやってきて毛を振る。そういう話です。

真ん中が薬師さまになると、こちらが日光菩薩、こちらが月光菩薩。やはり智慧と慈悲です。本尊が大日如来になると、金剛界曼荼羅と胎藏曼荼羅。それぞれ智慧と慈悲を表しています。

三尊形式や仏像のみならず、仏具などいろいろと仏教的なメッセージがひそんでいたりします。これを解読するのも楽しいですよ。

#### ■六字のみ名を称えつつ

「真宗宗歌」を続けていきましょう。二番でしたね、「とわの闇より すくわれし」のところ。永遠の闇から救われた身の幸せを、何に比べることができましょう、何ものにも比べることができません、と歌われています。

ただ、ここで我々がしっかりと考えなければいけないことは、教えの光に照らされて闇が晴れるのですが、足元を見れば影ができています。光が強ければ強いほど、なおいつそう黒々とくつきりと影が浮かび上がる。

親鸞聖人は、この影を一生ごまかさなかつた人です。九十年生きて、一度も悟つたと言わなかつ

た人です。影を抱えたまま生き抜いた。こういう人はなかなかいません。

ということ、影は消えないのですが、闇を打ち破られたということ、

二番の後半にいきましょう。先ほどの取り上げました「六字のみ名を」となえつつ 世の生業（なりわい）に いそしまん」です。浄土真宗の仏道をよく表している部分ですね。

われわれは何か特別な修行をするわけではない。坐禅もしないし、滝行もしない。厳しい戒律を守るといような面もない。われわれの仏道は日常生活の中にあるのです。

厳しい修行や戒律がないからといって、何をしてもいいわけではありません。世のなりわいにいそむところに浄土真宗の仏道があるのだらうと思えます。この社会を誠心誠意生き抜く。家庭生活を営み、社会生活を営み、いそしんでいく。しかし、単に「世の生業」をいそしむだけでは仏道にならない。六字のみ名を称えつつ、いそしむのです。

だから、日常生活の衣食住や仕事など、さまざまなところに浄土真宗独特の様式が生まれてきました。それらは教義に着地させることはできませんが、まさに浄土真宗を支える柱となっています。

浄土真宗独特の様式は、いろんな素晴らしいものがあるのですが、近江商人の「三方よし」などはよく知られています。近江商人には熱心な真宗門徒が多かつたんですね。近江商人たちは大坂に行つて商売をしても、お寺の鐘の音が聞こえるところで商売しよう。お寺の屋根が見えるところで店を出そう。そう考えて、北御堂と南御堂の周りに集まって船場をつくっていったわけです。

彼らの商売の理念は、売り手よし、買い手よし、世間よしの三方よしだったんですね。売り手もうれしいし、買った方も喜ぶ。それだけでは駄目で、社会も喜ぶような商売をしよう。このような理念は、世のなりわいにいそしむ態度が育んだ部分もあるのだらうと思えます。

宗教というものを考える場合、重要なポイントがあります。一つは「教え」ですね。これがない

と成り立ちません。教えというのは、自分自身の今の姿を写し出してくれます。鏡みたいに、教えと自分自身とを照らし合わせて、進むべき方向を知るのです。仏教の教えがあるから、自分自身の偏りに気づくことができる。教えがあるから、点検できます。

しかし、宗教は教えだけでは成立しません。そこには必ず人間の宗教的情緒や感情がある。ふたつ目として「情感」とします。

私が住職をしているお寺で、長年ずっとお聴聞を続けてこられた東本よしのさんというおばあちゃんがいらっしゃいます。この人が五十何歳かくらいの時です。一番末の息子さんが末期がんだと分かって、まだ三十前後でお亡くなりになったのです。

東本さんのお宅へお参りに行くと、いつも後ろで一緒になってお勤めされる。その日もそうでした。私が勤行を始めようとすると、後ろに坐っている東本さんが小さな声でつぶやくのが聞こえたんです。「しかし、あかんなあ……」と聞こえました。

勤行が終わった後に、「さつき、あかんなあ、とか言っていましたけど、どうかしました？」と尋ねました。そうしたら、「えっ、聞こえた？ つい口に出たんやな。何も無いねん、気にせんといて」と言う。「何がそんなにあかんの？」としつこく聞いたら、「私なんか、ずっとお説教を聞いてもあかんねん」と言うのです。「いやいや、そんなことはないと思いますけど」。「いや、あかん。いくら聞いてもあかんわ」。

東本さんは、「私はずっとお説教で『ほとけさまにお願い事をしたらいけない』と聞いてきた」というんですね。確かにそうですね。お願い事をするというのは、自分の都合をほとけさまに押し付けることになりますので、それでは仏道になりません。「お願い事をしたらいけないとずっと聞いてきたのに、いざ自分の末っ子が末期がんだと聞いたら、その日から毎日毎日、何とか助けてあげてくれとお願いしてしまつた。あんなに何十年も聞いてきたのに、いざ自分のことになると全然駄目だ」。

いくら聞いてもあきませんわ」と言うのですね。それを聞いて私は感銘を受けました。少なくともダメだとは思わなかつたですね。

東本さんの例でいいますと、ずっと聞いてきたからこそ見える自分の姿が見えたということでしょう。あれだけ聞いたのに、いざ自分となつたらそうはいかない自分。それがまざまざと見せつけられたのです。今まで仏法を聞いてこなければ、そもそも「お願い事をするのは駄目だ」という意識もなかつたかもしれせん。

こんなふうに、宗教(仏教)には「教え」と「情感」の両軸がある。しかし、私はもうひとつあるんじゃないかと考えています。それが「習慣」です。習慣がわれわれのピンチを救うということがあると思います。身に備わつたものが、自分を根底から支えてくれるというのがあるのではないか。これは、なかなか注目されない部分ではありますが、見落としてはいけないものです。

その地域とか、その家庭で、長い間にわたって続いてきた習慣。これが第三の柱です。思想研究の用語だと、「教え」をロゴス、「情感」をパトス、「習慣」をエトスと言います。

私は、ついつい軽視しがちなエトスの部分に注目すべきではないかと考えています。何しろ、浄土真宗というのは草の根型の宗派ですので、日常生活の中に分かち難く入り込んでいます。だから、浄土真宗というのはその地域独特のエトスをいっばい生み出してきたのですね。でも、その価値をわかっていない人がすくなくない。誰も評価しなければ、簡単になくなってしまう。何百年続いたものでも、すくなくなってしまうんですよ。だから、私は機会があるごとに語っていきたくて考えているのです。

例えば、今消えかけているらしいのですけれども、三重県いなべ市というところで、お葬式とときにお赤飯を炊くという地域があります。死んだのは悲しいことではなくて、お浄土に生まれる。

大変めでたいことだからお赤飯を炊くという、浄土真宗の教えから生まれた儀礼だと思われれます。そういう地域は他にもあります。しかし、ここはユニークで、お赤飯と一緒にからし汁も炊くらしいです。

いくら「教え」で、お浄土に往生したためめでたい日だ、と頭で理解しても、愛する人を亡くした悲しみというのはそう簡単に割り切れない。だから、からし汁が辛いという体で泣くらしいです。なんとすごい様式なのだろうと、感心してしまいました。

お赤飯はロゴスで成り立っている。しかし、そこにパトスから成るからし汁がある。二つがひとつとなって、お葬式にお赤飯とからし汁という独特のエトスが生まれた。ぜひ、この三つを同時に見ていただきたいと思います。

さて、お話を歌詞にもどしましょう。

「六字のみ名を となえつつ 世の生業(なりわい)に いそしまん」というところでした。ここには浄土真宗の要のみつつめ「称える」が出てきています。

六字のみ名とは、ご存じの通り「南無阿弥陀仏」です。「南無」の原語は、サンスクリットでは「ナマス」、パラリー語では「ナモ」になります。「お任せします」という意味です。インドとかネパールとかに行きますと、ヒンズー教徒の人が「ナーモー・シーヴァ」と唱えておられます。「シーヴァの神におまかせします」という意味ですね。

商売人さんの多い地域はガネーシャという、首が象の神の信仰が篤い。だから、「ナモ・ガネーシャ」と唱える人もいます。「ガネーシャの神にお任せして生きていきます」といったところ。阿弥陀は、アミターユスとアミターバからできた言葉です。「ミタ」は限界で、「ア」が付くと否定になり、「限りなし」となります。アミターユスは「限らないのち」、「アミターバ」は、「限らない光」です。

口に南無阿弥陀仏と称えることは、もともと「この世界に満ち満ちる限らない光といのちのはたらきにお任せして生きていきます」という、自分の生きる姿勢を表す言葉となります。これは、千数百年にわたって世界各地で称え続けられてきた言葉なんですね。

世界の主要宗教には、「代替できない大切な言葉」があります。それを口に唱えることによって、「定型の信仰告白」となるのです。これは人類にとって非常に重要な行為なのです。

例えば、ユダヤ教だと「シエマア」というのがあります。キリスト教にも、「主の祈り」だとか、「アーメン」とか、「ハレルヤ」とか。神の御こころのままでありますように、と口に唱えながら人生を生きていくのです。イスラム教だと「シャハーダ」があります。アラビア語で唱えます。これを二人のムスリムの前で口にすれば、そのときからムスリムになれるという大切な言葉です。他のものに代えることはできません。あるいは、「アラーフ・アクバル」も大切な言葉となります。

何ものにも変えることのできない自分の生きる方向を表す言葉を、口にしながら人生を生きっていくというのは、人類にとつてもものすごく大事なことだと思います。さまざまな民族、文化、宗教においてこういう言葉がある。

### ■三つがひとつ

このように、南無阿弥陀仏は「限らない光といのちの働きにおまかせします」という意味なのですが、親鸞聖人はこれを「おまかせします」ではなく「まかせてくれよ」と呼ばれていると説いておられます。これは親鸞聖人の独特のところなのです。他にこういう人はいません。自分の称える南無阿弥陀仏は、ほとけの呼び声だと言うのです。

原口針水の有名な歌がありますよね。

「われ称えわれ聞くなれど南無阿弥陀 連れてゆくぞの親の喚び声」。  
自分の称えたお念仏がほとけの呼び声として聞こえてくる。すなわち、「称えること」は「聞くこと」なのです。

では、「聞くこと」は？ このところは親鸞聖人が明確にお書きになつております。「しかるに經に聞かすは、衆生、仏願の生起・本末を聞いて疑心有ること無し。これを聞かすなり」と書いておられます。膨大な親鸞聖人の著作の中でも最も大事な一文の一つだと思ひます。「聞」が「信」だということです。「聞くこと」は「信すること」として成立する仏道。

このように「称えること」と「聞くこと」と「信すること」が一つになつて、浄土真宗の屋台骨を支えています。浄土真宗最大の特徴のひとつです。

最後に三番目の歌詞をざっと見ましよう。

「海の内外（うちと）の へだてなく み仏（おや）の徳の とうとさを」となっています。大正時代に真宗教団は相当海外で活躍しましたからね。そういう時代の事情がここには反映されている気がします。

ここにある「み仏（おや）」とは、ほとけさまのことです。ほとけさまをおやさまと呼ぶというのは、われわれの伝統ですね。

そして「浄土（みくに）の旅をともしせん」と結ばれています。帰るところのある人生を生き抜くのですね。

われわれは、息を引き取れば、お浄土に帰っていくという道を歩みます。それは、帰るところのある人生を選ぶというのにほかなりません。帰るところがあるから苦難の人生を、だましましたでも、這いずりながらも、何とか生きていける。まさに弱者の仏道、愚者の仏道、そう思ひます。

もちろん、生き死にの問題は、これが正しくて、これが間違っているという価値判断は成り立た

ないでしょう。例えば、クリスチャンは、死んだと考えずに、神の裁きを待つて眠っているという立場に立つ人がおられます。彼らにとっては、死というのはそういうものなのです。

また、死んだらそれまでと思つて生きている人もたくさんおられますよね。それが間違っているというわけではなくて、自らの覚悟で選んでいく道です。ただ、死んだらそれまでと思つて生きている人と、息を引き取ればお浄土に帰っていくという人生を歩む人と、生き方が違う。われわれは、「息を引き取ればお浄土に帰られるように、今を生きる」のです。それがわれわれの「世のなりわいをいそしむ仏道」です。

われわれは、どこかに無条件で抱きしめてもらえるからこそ苦難の人生を生き抜き、死にきつていくことができます。無条件で受容されるから、愚者であっても、弱者であっても生き抜ける。

『五体不満足』の乙武さんは、先天性四肢欠損症で、生まれたときから両手、両足がなかったそうです。何か事情があつてお母さんが体調を崩して、お医者さんは、今この赤ちゃんを見せるとショックが大きいということで、一カ月お母さんに乙武君を見せなかつたらしいです。

お母さんの体調が戻つて、両手両足のない赤ちゃんを連れてきたら、乙武さんのお母さんはその赤ちゃんを一目見るなり、「まあかわいい」と言つてギョツと抱いたそうです。乙武さんが本に書いていますが、この一言で僕はどんなにつらいことがあつても生きていける、一カ月たつて僕はそこで人間になつた、ということです。

どこかで無条件で、お帰りと抱きしめてもらえないと、われわれの人生はあまりにも厳しいですよ。

この点、現代人は結構苦勞していると思ひますね。例えば、フリーハグという癒やしムーブメントがあります。私は京都の三条の橋のところで、大阪の心齋橋のところで、見たことがあります。

フリーハグという看板を持って、若い男女が立っています。アメリカから始まったムーブメントらしいです。ハグとは抱くという意味ですね。道行く人が希望したらその人をぎゅっと抱くというムーブメントですね。

こういうムーブメントがあるということは、誠実に日常生活をこつこつ生きているのにもかかわらず、誰にも無条件で抱きしめられることのない人がたくさんいるのでしょう。その人にとっては、たとえ見ず知らずの人でも、無条件でぎゅっと抱かれたら、こんなにうれしいけど、あしたもう一日生きてみようというふうになるのかもしれない。

われわれ、苦難の人生であるからこそ、自分の都合が捨てられないからこそ、帰るところのある人生を選び取って、六字のみ名を称えながら世のなりわいをいそしむという仏道ですね。

冒頭で、「浄土真宗は現代人にウケない」と申しましたが、この点において、現代人の苦悩と向き合っていくことはできるはずですよ。今現代人が求めているものと、あまりびつたり来ているわけではないのですが、浄土真宗が説く「おまかせ」の覚悟や態度は、非常に重要です。

時間がオーバーしてしまいました。今日のお話はこのぐらいにさせていただきます。